『石城唱和集』寸断〈上巻の部〉

宮崎修多

詩文の集のなかでもいわゆる総集を繙くたのしさは、踵をつらねた詩人の名を総観しながら、各作のてざわの微妙な違いを味わうところにある。他者による撰集はまたすこし事情が変るが、なになに唱和と銘うたれた和韻詩連鎖の場合は、とりわけその感が強い。祝儀不祝儀のみぎり、皆が一の題に遵じて韻を同じくするのは、カイヨワぬしのルドゥスなんどを持出すまでもなく、唐土元白のむかしから意識されたあそびの法であった。山田俊雄先生、にわかに学園を去られるのが祝儀か不祝儀かはご自身にお決めいただくしかないけれども、このふしめに現教員お見送りの論文集。韻字もなきがごとく中身そろえぬところは、あえてあそびでなくした所為となん。その驥尾について、ひとつの唱和集をずたずたにきりさいてみせる小稿の荒ぶりも、もはや先生の学園にいまさぬさびしさゆえと云。乙亥春日。

『石城唱和集』は、近世後期筑前の漢詩人たちの詠をあつめた版本の総集で、松永子登の輯、樋口子侯奥村玉蘭の校訂になり、大本二巻二冊、京都寺町二条南の書肆野田治兵衛の刊行にかかる。享和から文化年間における福博詩壇の様相をうかがう屈強の資料でありながら、その正確な刊行年次や本文構成が不分明なことから、従来

あまり積極的に文学史郷土史に取入られることがなかった。筆者はさきに『福岡県史』通史編福岡藩文化（下）「漢詩文」の章において本書の史的位置付けをこころみたが（平成六年三月刊）、近世全期にわたった通史的記述であったために細かい本文分析を省略している。本稿では、『石城唱和集』の解体を可能なかぎりにこころみることによって集としての構成を考え、成立に関する卑見もまじえて史家の該書利用に供したいと思うのである。もっとも、坊間流布しているとは言い難い『石城唱和集』の本文そのものを掲げることなしに、その剔抉の残骸のみをみせるなどというのは不親切のそしりをまぬかれまい。よって本文紹介については他日を期す。かつ、紙幅の都合により今回は上巻に限ったことも諒とされたい。

凡例

一、底本は京都野田治兵衛刊二巻二冊本を使用した。（太宰府天満宮文庫蔵本、福岡県立図書館蔵本、京都大学附属図書館蔵本を参照。いずれも同版である。）

一、詩群番号、仮題、（版本における位置を示す丁数、詩の通し番号）をまず一行目に立項する。詩の通し番号は私に付したもの、単なる目安にすぎない。

一、次に詩題と作者を、唱和の受渡状況を考慮しつつ示す。その際、最初に発端となった詩の題を「　」に入れ、和詩の題は（　）に入れ、いずれも版本の標記のままに掲げた。なお、「幻弇」は＊以下の備考などでは通名である「曇栄」に統一している。

一、次に詩体、韻字を示す。連作は①②③…ⅠⅡⅢ…等で区別した。

一、＊印以下に、想定されうる授受の状況や他資料を勘案した所見を記す。
一、上下巻にみえる入集者は次の通りである。

〈『石城唱和集』入集者一覧〉

（上下巻とも。詩集出現順。見出し名は『石城唱和集』中の称。【　】内は版本に施された割註。（　）内は筆者補記）

幻弇【釈宗曄字曇栄】（名宗曄、字曇栄、号禅月・龍華・松濤、福岡崇福寺八十七世、妙楽寺永寿院主、亀井南冥弟、文化十三年没六十七歳）
南冥【亀井魯字道載】（名魯、字道載、称主水・道哉、号南冥、文化十一年三月没七十二歳）
宜春【戸次晁字叔陽】（称彦助あるいは光助、別号朝陽、本姓清水氏、天保九年六月没七十二歳）
古処【原震平字士萌】（別名叔曄、文政十年一月没六十一歳、秋月藩士）
龍門【松永豊字子登】（名一豊・豊、称宗助・徳右衛門、別号花遁山人、嘉永元年十一月没六十七歳）
雲華【釈大含】（豊前古城正行寺住職、嘉永三年十月没七十八歳）
滄洲【吉川明字子允】
昭陽【亀井昱字元鳳】（称昱太郎、号空石・月窟・天山遯者、天保七年五月没六十四歳）
梅処【呉孟明字士信】（称順平・十左衛門、紅林（呉林）氏、文化十四年八月没五十四歳）
玉蘭【奥村源字淵伯】（別名保全、称源之丞、醤油醸造業、文政十一年五月没六十八歳）

菊舎【釈道号一字庵】（長府藩士田上氏女、称道、文政十年十一月没六十五歳）
天均【梶原熙字士敬】（名景熙、称善太夫、別号鵞石、文政十年一月没五十歳）
巻阿【黒田瑗字子璋】（名利亮、称左兵衛、秋月藩主黒田長舒公子、のち木下内記）
省園【樋口直字子侯】

○亀井昭陽題言「題唱和集首」（上巻首）

＊文末年記は「癸亥三月亀井昱謹書」とあり版下も昭陽自筆。享和三年三月の成。他に慶応大学斯道文庫蔵自筆本『昭陽文集』所収の『癸亥稿』や、日田広瀬家蔵の写本『昭陽先生文集二編』（木田省編）の巻二にも、若干字句の異同はあるものの「題癸亥和集首」と題されて採択（『亀井南冥昭陽全集』第八巻下）。「癸亥唱和集」が当初の原題であったか。

○第1群　享和三年元日箱崎詠（上巻1オ～ウ、1～4）

「癸亥元日遊函崎作」幻弇（和）南冥・（同）宜春・（同）古処

五言律詩、韻字「行・生・鶯・情」（下平声八庚）

＊古処の『癸亥稿』では「次韻幻弇禅師癸亥元日遊函林」と題す。曇栄詩からの直接の次韻であるから、唱和が南冥→宜春→古処と連接したのではなく、曇栄の原稿が諸家に回覧されたものとみてよいであろう。享和三年正月唱和。このことは他の唱和でもおおむね共通することのようである。以下、『癸亥稿』と称する古

処詩稿に関して述べておく。原古処享和三年中の年次日次別詩稿としては、管見のかぎりで大阪大学懐徳堂文庫蔵小天地閣叢書本と秋月郷土館蔵吉田平陽筆写『古処先生詩集』の二本があった。古処の門人吉田平陽の筆写年次は文化三年で、西村天囚小天地閣叢書の近代写本をはるかに遡る古いものだが、古処の当唱和詩「閑人逢上日。倏挈二僮行。山自湖心笑。風催花信生。徐攀板橋柳。飽聴石堂鶯。一曲濡衣唱。悠々覧古情」は吉田本もこれに同じで、天囚本は初句に「閑人閑自若」、第四句「春従柳眼生」、第五句「徐攀松寺茗」あるいは「徐攀函駅茗」の初稿を主軸として改訂本文（すなわち『石城唱和』や吉田本の本文）を傍書するかたちを採っており、所在不明の自筆稿本をかなり忠実に再現した形跡がある。よって本稿では古処の『癸亥稿』については、以下特にことわらないかぎり天囚の小天地閣叢書本をもって参照本とした。

○第2群　享和三年元日詠（上巻1ウ～2オ、5～7）

「癸亥元日」南冥↓（和）幻弇（同）・（同）宜春

五言律詩、韻字「天・鮮・仙・埏・前・年」（下平声一先）

○第3群　享和三年元日詠（その二）（上巻2オ～3オ、8～11）

「癸亥元日」宜春↓（和）南冥・（同）幻弇・（同）古処

五言律詩、韻字「春・新・親・人」（上平声十一真）

＊古処『癸亥稿』では「次韻戸監叔陽」と題す。

○第4群　享和三年元日詠（その三）（上巻3オ～ウ、12～14）
「癸亥元日」幻弇→（和）南冥・（同）宜春
七言絶句、韻字「茶・家」（下平声六麻）

○第5群　首春偶詠（上巻3ウ、15～17）
「首春偶興」古処→（和）幻弇・（同）宜春
五言絶句、韻字「開・杯・苔」（上平声十灰）
＊享和三年正月。古処『癸亥稿』では「右次韻家弟大幹」と左註あり。大幹は古処異腹の弟貞吉で十七歳年下。本来、古処の原詩は唱和用につくられたものではなく、大幹と息子白圭と義弟佐谷君穎の三人の首春詠に答えて各々作った連作三首の一であった。

○第6群　正月送別詩（上巻3ウ～4オ、18～20）
「首春送別」古処→（和）宜春・（同）幻弇
五言絶句、韻字「程・驚」（下平声八庚）
＊享和三年正月。古処『癸亥稿』では「人日大雪藤君豹来告別卒賦送之」と題され、正月七日大雪のなか、訪れた日田の友人佐藤玄猷（字君豹、号寓斎）に贈呈した送別詩を原韻としていることが分かる。佐藤は咸宜園の詩人。古処詩句に「烟月江南路」、宜春句に「東路三千里、浪華幾日程」などとあって、関西への東遊で

もあろうか。

○第7群　玉せせり歌（上巻4オ～5ウ、21・22）

「正月三日函崎観奪珠戯歌」宜春→（同）幻弇

七言古詩二十四句（和韻せず）

＊南冥『癸亥稿』（慶応大学斯道文庫蔵、『全集』八上所収）正月頃の記載に「観奪珠戯歌」七古二十四句あり、曇栄詩と同韻である。享和三年正月三日、宜春・曇栄・南冥そろって観戦に筥崎宮へ赴いたのであろう。

○第8群　臥雪詠（上巻5オ～6オ、23～26）

「臥雪」宜春→（和）幻弇・（同）南冥・（同）古処

七言律詩、韻字「天・前・堅・泉・肩」（下平声一先）

＊享和三年。古処『癸亥稿』では一～二月頃の作として「次韻戸叔陽雪中作」と題されて並ぶ。やはり戸次宜春作への直接の次韻である。

○第9群　擬早朝詩（上巻6オ、27・28）

「擬早朝」宜春→（和）幻弇

五言律詩、韻字「微・威・扉・暉・衣」（上平声五微）

＊年次未詳。五律ながら、賈至・杜甫・王維・岑参らの七言の和詩「早朝大明宮」を擬した詩風。もっとも杜甫らの作はいまだ韻字を同じくする時期のものではないゆえ、ここで微韻の使用は宜春の案出。

○第10群　雪泊詩（上巻6オ～ウ、29・30）

「雪泊」宜春→（和）幻弇

五言律詩、韻字「家・花・鴉・賒」（下平声六麻）

＊おそらくは、享和三年春中、前の「擬早朝」詩と同時の作。

○第11群　人日詠雪（上巻6ウ～7オ、31～36）

「人日雪三首」幻弇→（和）宜春

五言絶句三首、韻字「時・遅」（上平声四支）「寒・看」（上平声十四寒）「来・哉」（上平声十灰）

＊おそらく享和三年。

○第12群　静女怨詩（上巻7オ～ウ、37～42）

「静女怨二首」宜春→（同二首）幻弇・（同次戸監韻）古処

七言絶句二首（宜春・古処）・五言絶句二首（幻弇）、韻字「寒・看・歓」（上平声十四寒）「鬟・間・山」（上平声十五刪）…以上宜春・古処、「重・蹤」（上平声二冬）「涯・時」（上平声四支）…以上幻弇

＊享和三年唱和。古処『癸亥稿』では該詩は同年一～二月辺に並んでおり、題は「静女怨次韻戸監」となっている。古処は詩体韻字とも宜春に揃えるが、曇栄はわざと韻をはずし、体も五絶に変えて詠じている。

○第13群　戯詠（上巻7ウ～8オ、43・44）

「戯呈幻弇栄公」宜春→（和）幻弇

五言絶句、韻字「朽・有」（上声二十五有）

＊年次未詳。

○第14群　早春雪三首（上巻8オ～ウ、45～50）

「早春雪三首」幻弇→（和）宜春

五言絶句三首、韻字「新・人・春」（上平声十一真）「花・家」（下平声六麻）「扃・聴」（下平声九青）

＊年次未詳。

○第15群　享和三年正月大雪詩（上巻8ウ～9ウ、51～65）

「癸亥首春午未申酉大雪五首」南冥→（和）幻弇・（同）古処

五言絶句五首、韻字①「奔・門」（上平声十三元）②「烈・抜・裂」（入声）③「尺・酌・客」（入声）④「敵・棹」（入声）⑤「人・親」（上平声十一真）

＊第二首（②）・第三首（③）・第四首（④）において古韻の通韻を用いたことが認められる。各韻字を記せば、②は南冥古処「烈・抜」曇栄「烈・裂」、③は南冥吉処「尺・酌」曇栄「尺・客」、④は南冥古処「敵・棹」曇栄「敵・酌」。仮に平水韻でいえば②で黠韻屑韻が、③で薬韻陌韻が、④で錫韻覚韻薬韻が各々混在する体をとる。入声における質物月曷黠屑韻の相通は諸書にみえるが、よく使用された邵青門の『吉今韻略』では薬韻は独用とする。しかし中井履軒の『履軒古韻』『諧韻瑚璉』では屋沃覚薬陌錫職韻の通用も指摘。南冥らはかかる韻書に拠るというより、古詩の味読から経験的に相通を感知していたとみるべきか。

○第16群　贈曇栄次韻詩（上巻9ウ～10オ、66～69）

「贈幻弇尊者次韻其佳什二首」宜春→（和）幻弇

五言律詩二首、韻字①「哉・堆・回・杯」（上平声十灰）②「陲・期・姿・時」（上平声四支）

＊年次未詳。

○第17群　閏月三日詠雪詩（上巻10オ～ウ、70～75）

「閏正月三日雪三首」幻弇→（和）宜春

五言絶句三首、韻字①「驚・明」（下平声八庚）②「隣・人」（上平声十一真）③「難・安」（上平声十四寒）

＊閏一月ゆえ享和三年。

○第18群　松永士実悼詩（上巻10ウ～11オ、76・77）

「輓松永士実十韻」幻弇・（同）南冥

五言古詩二十句十韻、韻字「郷・陽・腸・行・霜・堂・牀・方・香・祥」（下平声七陽）

＊南冥詩は五言律詩一首で次韻詩にあらず。韻は「如・余・儲・誉」（上平声六魚）。おそらくは同時期に成れる同趣のものを並べたもので、両詩製作事情に関係はない。松永士実（通称徳右衛門）は豪商松永子登の父。子登の書室名を清賞書堂といえるはこの父の代からであったことなど、曇栄詩の割註にあり。いわく「士実。名篤。自号蕉雪。其堂名曰清賞。好購古書画。又善相剣云。卒年五十一。其嗣豊。字子登。好学。以孝聞」と。南冥の『癸亥稿』（慶応大学斯道文庫蔵）ではこの悼詩（「悼松永士実」）は享和三年一月の辺に記載されるから、士実の死もその頃だったのであろう。春山育次郎『松永花遁』（明治四十年刊）にも「享和（ママ）三年二月は、父徳右衛門の世を去りたる翌月なり。」というくだりあり。

○第19群　正月贈詩（上巻11オ～12オ、78～86）

「首春贈戸監宜春三首」幻弇→（和）宜春・（誦幻弇老師贈戸宜春詩曰一月詩筒幾往来微君懐抱向誰開云云有感観於洋峨相得之盛次韻副其意三首）南冥

七言絶句三首、韻字①「来・開・梅」（上平声十灰）②「辞・時・知」（上平声四支）③「霞・加・花」（下平声六麻）

＊「一月詩筒幾往来、微君懐抱向誰開」とは曇栄第一首冒頭二句。南冥『癸亥稿』（慶応大学斯道文庫蔵）でもこの題詞のまま一月～閏一月辺に出ているから、三名の詠すべて享和三年一月～閏一月の間の作とみてよい。

ここでは南冥題詞にいささか雅交の様態がうかがえるゆえに、「同」などと短縮せずにそのまま掲げたのであろう。

○第20群　江山春興多詩（上巻12ウ、87・88）

「江山春興多」宜春→（和）幻弇

五言律詩、韻字「分・紋・氛・曛」（上平声十二文）

＊この句題未詳。年次未詳。

○第21群　高大晋宅分韻詩（上巻12ウ～13オ、89・90）

「高大晋宅集分韻含字」龍門→（和）幻弇

七言律詩、韻字「耽・潭・含・談・譚・三」（下平声十三覃）

＊年次未詳。高大晋宅の詩会では分韻だったので、曇栄詩は後日子登から示された当日の作に次韻したものであろう。子登詩中に「市隠」と称される高大晋については余り詳しくは分からない。子登の『花遁詩鈔』（天保十三年刊）や広瀬淡窓の『遠思楼詩鈔』（天保八年刊）にも登場するこの人物は詩をよくし、かつ医師であったことがそれら諸書から知られるが、筆者寓目の『遠思楼詩鈔』一本には「高橋純孝」と旧蔵者書入れがあったことを報告しておく。

○第22群　大含詩次韻（上巻13オ～ウ、91・92）

「次韻酬大含上人見寄」幻弇→（用前韻寄大含上人）南冥

七言律詩、韻字「余・如・書・除・盧」（上平声六魚）

＊享和三年。南冥『癸亥稿』では一月～閏一月間に記載。題は「獲大含上人詩書賦呈用幻弇之韻」とあり、この場合は大含の詠に直接次韻したというより、曇栄詩を介したものであったらしい。大含は豊前古城の正行寺（東本願寺派）住職。雲華上人ともいい、詩画に長じ頼山陽との交友でも知られる。この時三十一歳。原韻は不明。

○第23群　雪中詩（上巻13ウ、93・94）

「雪中作」古処→（和）宜春

五言絶句、韻字「夕・尺」（入声十一陌）

＊享和三年。古処『癸亥稿』では一～二月辺に記載される。

○第24群　関公萬人刀詩（上巻13ウ～14ウ、95～97）

「関公萬人刀二首」幻弇・（漢寿亭侯萬人刀歌）宜春

五言絶句二首、韻字①「人・塵」（上平声十一真）②「月・没」（入声六月）

＊年次未詳。宜春詩は次韻詩でなく、七言古詩（三十三句）一首のみであるが、曇栄に呼応してつくられたも

のであろう。ゆえに唱和とはいえぬものの、同内容ゆえこの三首を一群のものとしておく。

○第25群　詠唱和集詩（上巻14オ～ウ、98・99）

「謝栄公見眎唱和集」宜春→（和）幻弇

七言律詩、韻字「流・謳・甌・休・投・酬・優・愁」（下平声十一尤）

＊詩中に春をあらわす句あり。おそらくは集中上巻の享和三年春の詩群と時おなじくするものであろう。曇栄が宜春に見せた「唱和集」が、『石城唱和集』の原初形態であるとすれば、享和三年三月の年記をもつ亀井昭陽の序詩はこれに冠せらるべきものだったと思われる。

○第26群　春寄宜春詩（上巻13オ～ウ、100～102）

「寄戸監宜春」古処→（和）宜春→（寄戸君宜春用其与原文学士萌唱和之韻）幻弇

五言律詩、韻字「城・明・鐺・栄」（下平声八庚）

＊享和三年。この場合は、古処の寄詩にこたえた宜春の作をみて曇栄が次韻した例である。古処『癸亥稿』では春一月頃の記載だが、日時不明。ちなみに、古処詩冒頭は「君住宜春里。我家飽月城」となっており、宜春宅は福岡城東春吉にあり、宜春の号もそこに由来する。

○第27群　新歳詩（上巻15ウ、103）

「贈士萌原君用新歳韻」宜春
五言律詩、韻字「春・新・親・人」（上平声十一真）
＊この詩のみ孤立したかたちで挿入されるが、これは第3群に属する古処の元日詠への再和である。前群での和韻詩とともに古処におくったゆえに、当位置に混入したものと思われる。享和三年。

○第28群　春日漫興詩（上巻16ウ、104・105）
「春日漫興」宜春→（和）幻弇
七言絶句、韻字「長・堂・忙」（下平声七陽）
＊年次未詳。

○第29群　油山帰路・惜花詩（上巻16オ～ウ、106～109）
「登東油山帰路作」幻弇→（和）宜春、「惜花」幻弇→（和）宜春
七言絶句、韻字「遅・疲・時・持・随」（上平声四支）
＊二題ながら韻字をおなじくするので二群に分けず、同時のものとみなして一群とした。曇栄が題を異にする二首をまとめて宜春に示し、それに各々答えたものを、題毎に分けて掲載したものであろう。これも年次未詳。

○第30群　漫成詩（上巻17オ、110・111）

「漫成」宜春→（和）幻弇

五言絶句、韻字「篇・千」（下平声一先）

＊前群に続くものと思われる。年次未詳。

○第31群　呈仙厓詩（上巻17オ～ウ、112・113）

「遊聖福寺呈仙厓尊者」龍門→（和）幻弇

五言律詩、韻字「年・懸・禅・天・淵・前」（下平声一先）

＊年次未詳。

○第32群　雲華幻弇唱和（上巻17ウ～18オ、114～116）

「寄呈幻弇老禅師」雲華→（和）幻弇→（畳韻酬呈幻弇老弾師）雲華

七言律詩、韻字「扉・微・衣・機・飛」（上平声五微）

＊年次未詳。雲華114詩はかれの「野稿」なる成稿時未詳の詩稿に載るが（赤松翠陰編『雲華上人遺稿』昭8刊所収）、これは後日に某人に斧正を請うた稿であり、116の畳韻詩は採られない。雲華詩114第一句に「有縁孤策叩弾扉」とあって、享和三年の二～三月頃、雲華が曇栄を訪問して贈った詩が発起とみえる。三詩同日の作ではない。

○第33群　三月三日唱和（上巻18オ～ウ、117・118）
「三日過友人荘」幻弇→（和）宜春
七言律詩、韻字「氳・聞・沄・軍・曛」（上平声十二文）
＊年次未詳。

○第34群　三月病後詩（上巻18ウ～19オ、119・120）
「春晩病後偶作」幻弇→（和）宜春
七言絶詩、韻字「除・盧・如・余・書」（上平声六魚）
＊これも前33群と同時か。

○第35群　夏菊詩（上巻19オ～ウ、121～123）
「夏菊」滄洲→（和）幻弇→（和）南冥
七言絶句、韻字「幽・流・秋」（下平声十一尤）
＊享和三年。南冥『癸亥稿』では「五月菊次幻弇主人韻」と題されて、たしかに享和三年五月頃に記載される。ここも曇栄に次韻しており、滄洲作を次いだわけではない。この場合吉川滄洲と南冥の交友が存したか否かは、確証を得られないのである。

○第36群　八月中秋詩（上巻19ウ～20オ、124～126）

「中秋書感」滄洲→（和）幻弇→（次韻栄公和吉子允中秋作）宜春

五言律詩、韻字「開・来・杯・哉・灰・台」（上平声十灰）

＊前群とおなじく享和三年の唱和であろう。宜春詩題にあるように、宜春は曇栄詩に和したのであり、吉川滄洲に和したのではない。

○第37群　九月九日唱和（上巻20オ～ウ、127～129）

「九日感興」昭陽→（和）古処・（同）幻弇

七言絶句、韻字「顔・間・還」（上平声十五删）

＊享和三年。昭陽詩は『昭陽癸亥稿』（慶応大学斯道文庫蔵稿本、『全集』八下所収）に「九日退食自公」の題で載る。古処詩は古処『癸亥稿』に「次韻亀空石九日作」と題して掲げられる。ただし享和三年の冬の記載であり、次韻は十月以降だったのであろう。

○第38群　享和三年中秋唱和（上巻20ウ～21ウ、130～136）

「癸亥中秋竟夜烈風不得望月」南冥→（九月十三日過青桂堂賦贈主人用亀翁中秋之韻）幻弇→（和）宜春→（畳韻酬戸監見贈二首）幻弇〔上平声十灰韻の五律を追加して二首とす〕→（再和）宜春〔同上二首〕

七言律詩、韻字「風・空・翁・叢」（上平声一東）

＊南冥詩はその『癸亥稿』に「中秋烈風飛沙不得望月即時」と題して挙がる。曇栄詩は九月十三夜に青桂堂（未詳、宜春の書堂か）にて南冥の韻を次いだものだが、当日南冥自身もそこに同座している（南冥『癸亥稿』に「九月十三日同幻菴主翁過青桂堂」「又」二首あり）。ただしそこでは曇栄に畳韻したものをつくっていないので、『石城唱和集』には採られなかったのである。

○第39群　曇栄宜春唱和（上巻21ウ～22オ、137～140）

「和戸監近什却寄二首」幻弇→（再和）宜春

五言律詩二首、韻字①「居・初・虚・閭」（上平声六魚）②「微・機・輝・帰」（上平声五微）

＊年次未詳ながら享和三年秋か。

○第40群ノ一　冬至梅詩（上巻22オ～ウ、141・142）

「冬至梅」梅処→（和）幻弇

七言絶句、韻字「梅・灰・開・来」（上平声十灰）

＊享和三年。曇栄和韻詩第三句に「先生四十因詩瘦」とあり、これが梅処の年齢をさすか。梅処没年は昭陽『空石日記』（全集第七巻）文政元年九月二十三日条の欄外書入れに、「梅処以丁丑（文化十四年）八月十七日客死東都、年五十四」とみえ、逆算すれば四十歳は享和三年ということになるので、当年作とした。なお、この年の冬至は十一月九日。

▽第40群ノ二　梅処曇栄唱和（上巻22オ、143・144）

「寄幻弇尊者」梅処→（和）幻弇

七言絶句、韻字「松・鐘・峰」（上平声二冬）

＊前群に準じて享和三年。

▽第40群ノ三　箱崎唱和（上巻23オ、145・146）

「函崎書感」梅処→（和）幻弇

七言絶句、韻字「烟・年・辺」（下平声一先）

＊前群に準じて享和三年。

▽第40群ノ四　宜春和韻詩四首（上巻23オ～ウ、147～150）

「寄懐呉君士信用其近作韻」宜春

七言絶句四首、前掲梅処「冬至梅」と「函崎書感」の韻に各々二首宛和す

＊前群に準じて享和三年。この第40群ノ一・二・三の梅処詩は同時に曇栄に送致されたものとおもわれる。それを見た宜春は中から二首の韻をかりたのである。いずれも冬至以後の唱和で、四群一括して見るべきもの。

○第41群　冬日雑詩（上巻23ウ～26オ、151～171）

「雑詩六首書呈宜春」幻弇→（誦幻弇弾師雑詩賦此却寄）南冥・（呈亀先生用栄師佳什韻）宜春→（和）南冥

七言絶句連作、曇栄原詩韻字①「東・同・中」（上平声一東）②「臣・垠・親」（上平声十一真）③「言・尊・軒」（上平声十三元）④「姿・宜・奇」（上平声四支）⑤「方・王・章」（下平声七陽）⑥「徠・才・恢」（上平声十灰）、南冥却寄詩韻字Ⅰ「麗・灰・来」（上平声十灰）Ⅱ「峨・倭・多」（下平声五歌）Ⅲ「年・賢・愆」（下平声一先）、宜春次韻詩韻字①「言・樽・軒」（上平声十三元）②「臣・垠・親」（上平声十一真）③「東・同・中」（上平声一東）④「芳・王・章」（下平声七陽）⑤「籬・宜・奇」（上平声四支）⑥「台・来・才」（上平声十灰）、南冥和詩韻字①②「芳・王・章」（下平声七陽）③④「籬・宜・奇」（上平声四支）⑤⑥「台・来・才」（上平声十灰）

＊この一連の唱和は次のように行われたことを想定しうる。まず曇栄の「雑詩」六首が宜春に贈られた。南冥はそれらを曇栄ないし宜春から見せられ感じたまま、次韻でない却詩を三首曇栄に呈する。それとは別に、詩を贈られた宜春は曇栄の六首に次韻し、あわせて南冥にも奉呈した。南冥二度目の六首は、曇栄の原什でなく、その宜春作にこたえたものである。韻字をみれば忠実に宜春詩のうちの三首をなぞっていることがわかるであろう。南冥『癸亥稿』には最初の南冥詩三首を「雑詩」として載せるが、二度目の和詩は「次韻戸監宜春見寄十六首」として宜春詩全部に和韻した連作十六首を載せている。『石城唱和集』はこれらから六首を選んだもの。南冥『癸亥稿』記載の位置からみて、唱和は享和三年冬十月頃である。

○第42群　宜春曇栄唱和（上巻26オ～ウ、172・173）

「冬夜吉子允村山人過訪喜賦」宜春→（和）幻弇

七言律詩、韻字「盟・情・成・生・名」（下平声八庚）

＊吉子允は吉川滄洲、村山人は次群の唱和からして奥村玉蘭。この二名の宜春宅来訪に基づいて作られたものだが、宜春詩首句に「歳晏弟兄尋社盟」とあり、あるいは吉川は玉蘭の実兄にあたるか。おそらく享和三年の歳晩である。

○第43群　宜春玉蘭唱和（上巻26ウ～27オ、174・175）

「贈邨山人」宜春→（和）玉蘭

五言律詩、韻字「耽・甑・談・探」（下平声十三覃）

＊宜春詩第三四句「楼蔵書萬巻、家富醤千甑」とあるから、邨山人は博多の醸造業主奥村玉蘭その人をいう。玉蘭詩第三句に「良朋来曳杖」とあって、おそらく今度は宜春が中島町の玉蘭宅を訪うたのであろう。前群と同じく享和三年冬と思われる。

○第44群　滄洲宜春唱和（上巻27オ～ウ、176～178）

「冬夜作」滄洲→（同）宜春・（同）幻弇

五言律詩、韻字「間・閒・関・班・山・顔」（上平声十五删）

＊これも前群前々群とかかわる享和三年歳晩の唱和であろう。曇栄の次韻詩は後に付加したものか。

○第45群　印南酒贈答詩（上巻27ウ、179・180）

「摂人饋印南酒乃貽宜春園主翁附以一絶」↓（和）宜春

七言絶句、韻字「醇・人・春」（上平声十一真）

＊原詩、詩人名なきも前詩が曇栄ゆえ、当作も曇栄であろう。曇栄に印南の酒を贈った摂州人は未詳。曇栄詩第三句に「臘月軽寒氷雪少」とあり、これもおそらく享和三年歳晩の唱和。

○第46群　再畳韻雑詩（上巻28オ～ウ、181～186）

「再畳寄亀夫子六首」宜春

七言絶句六首、韻字①「源・尊・藩」（上平声十三元）②「臣・垠・親」（上平声十一真）③「宮・東・中」（上平声一東）④「芳・王・章」（下平声七陽）⑤「籬・宜・奇」（上平声四支）⑥「台・来・才」（上平声十灰）

＊韻字からもわかるように、これは第41群の曇栄雑詩六首に再び次韻したもの。この位置に掲げられるのは、再度作られ南冥に呈されたのがこの年末だったためか。

○第47群　幽居詩（上巻28ウ～29オ、187～188）

「幽居」梅処↓（和）宜春

五言律詩、韻字「寒・丹・安・看」（上平声十四寒）

○第48群　雑詩唱和（上巻29オ～30オ、189～200）

「三畳韻寄幻弇尊者六首」宜春→（再和）幻弇

七言絶句六首、韻字①「言・尊・軒」（上平声十三元）②「東・同・中」（上平声一東）③「芳・方・王・章」（下平声七陽）④「籬・宜・寄」（上平声四支）⑤「台・来・才」（上平声十灰）⑥「賓・倫・垠・親」（上平声十一真）

＊韻字からもわかるが、三たび曇栄の雑詩六首に宜春が畳韻し、それに曇栄本人がさらに和したもの。この曇栄雑詩六首とそれに乗じた諸家唱和は、この上巻のクライマックスともいえる。享和三年。

○第49群ノ一　子登南冥唱和（上巻30ウ、201・202）

「奉寄南冥先生」龍門→（和）南冥

七言絶句、韻字「生・盟・清」（下平声八庚）

▽第49群ノ二　子登曇栄玉蘭唱和（上巻30ウ～31オ、203～206）

「奉呈幻弇尊者用其与呉士信唱和之韻」龍門→（和子登見贈二首）幻弇→寄懐幻弇尊者用其旧作之韻）玉蘭

七言絶句、子登詩韻字「松・鐘・峰」（上平声二冬）、曇栄詩韻字①「生・盟・清」（下平声八庚）②「松・鐘・峰」（上平声二冬）、玉蘭詩韻字「松・鐘・峰」（上平声二冬）

＊この第49群の成立は次のように解せられる。まず、松永子登が南冥に七絶一首を奉呈。南冥が和した。それとは別に子登がかつて呉梅処が用いた詩韻（143番に用ゆ）を用いて曇栄に七絶一首を示す。その時子登は南

冥に贈呈した七絶もともに開示したのであろう、曇栄の和詩はその両詩に答えたものであった。そして、かつての呉梅処と曇栄の唱和詩韻をかりて、今度は玉蘭が次いだのである。南冥詩は『癸亥稿』に見えないが、これを含めてすべて享和三年冬と思われる。

○

さて、この上巻において特筆すべき第一は、所収詩すべて成立年次を享和三年に特定してまずは差し支えないことであろう。次輯でも詳述するが、文化元年以降の作がかなり混雑した状態で集められている下巻に比べればこの上巻はおとなしく整っており、上下巻間に截然たる性格の相違を有している。

見てきたように、年次の判明するものだけを取上げても、春から冬までとほぼ日次に即して配されたごとくである。おそらく筆者が成立時未詳とした唱和群も、上巻に限っていえば、集中のその位置前後に挙行されたものとみておいて大過ないのではあるまいか。たとえば、本来ならば一括して掲出さるべき上巻後半の曇栄「雑詩六首」に端を発した唱和の数々も、第41群・第46群・第48群の位置に散在していることは、この上巻の諸作が成立時をかなり忠実に反映して配列されたことを感じさせるからである。ありていにいえば当時存在していた各唱和の原稿をそのまま成立順に並べて礎稿としたということなのだろうが、させる編集の粗笨が読者を宜春曇栄周辺の雅境へ、ひととせの四季のうつりとともにいざなうという図らざる僥倖を生じたのであった。

とはいえ、丸一年の清唱をまとめる意図から、まず上巻がひといきに編まれたという簡単な事情ではおそらくあるまい。ほぼ成立順の配列なることを前提として、こころみに上巻所収詩総数二〇六首を四季に分けてみると

次のようになる。

春…一二〇首　（第1～34群）
夏…三首　（第35群のみ）
秋…一七首　（第36～39群）
冬…六六首　（第40～49群）

全体の半分以上を占める春の一二〇首に詠雪が多いことから推して、この享和三年春初の降雪は、北筑の詩人たちをして異例の詩興をかきたてたものであったらしい、梓にのぼすかどうかは措き、唱和を一つの集として纏める企てはあるいはすでにこの頃から存していたのかもしれぬ。ともかくも曇栄あたりが春日の唱酬をかき集めた一冊を手元に蔵していたと考えられるのだが、それを甥の昭陽に示して成さしめたのが、版本劈頭に掲げられた題言だったのではあるまいか。しかもこの昭陽題言の年記は「癸亥三月」である。すなわち、慶応大学斯道文庫蔵自筆本『昭陽文集』所収『癸亥稿』や、日田広瀬家蔵の写本『昭陽先生文集二編』（木田省編）におさまるこの文章の題「題癸亥唱和集首」のいう「癸亥唱和集」とは、この三春三月までの諸作を一団として称したものと、筆者は推測している。前掲第25群で「謝栄公見眎唱和集」なる宜春の七律が曇栄に対して贈られており、その首句に「陽春高唱見風流」とあることからみても、この「唱和集」こそが春期の詩を集めた筆者のいう原「癸亥唱和集」であった可能性は高い。また、たびたび引用した南冥『癸亥稿』中、三月辺に記載された七律一篇の題詞に「幻弇主人録社友首春諸什成小冊子名曰唱和集戸宜春誦而作詩主人次韻余亦傚顰」とあって、韻は「酬・流・優・愁・休」と第25群の下平声十一尤に合致していた。南冥題詞にいう宜春→曇栄の応酬はおそらくこの第25群

のことをいうのであろうが、すでにこのころ原「癸亥唱和集」が「小冊子」として諸家の回覧に供されていた証でもある。第25群詩が第98番の位置にさし挟まっていることを考えても、当時詩数は一二〇首にも満たない「小冊」だったということになろう。

さらに同年十月頃、曇栄が宜春にあててものした「雑詩六首」が、かれの国家観学問観を披瀝したものだったゆえに諸家の関心事となり、いくたびか和韻がこころみられる。もとより「雑詩」に付随した別題の唱和もおこなわれたことであろう。それらを総じてみれば本年春の唱和集（原「癸亥唱和集」）に比して遜色なかったがゆえに、この時点で春の唱和群との合体が計画されたものとみてよいかもしれない。加うるに例年通り挙行されていたであろう秋の看月詩宴の諸作を充填し、夏のわずかな応酬も添え、成立順に並べてゆけば、不均衡ではあるがひとまずは四季を揃えることが出来る。尋常みられるような春秋の雅趣に主眼をおいた詩集とは異なり、春に次いで冬の作が多いのはおそらく右のような事情のゆえであった。かくて現在みるごとき『石城唱和集』上巻の体裁が備ったというのが、筆者の屋上に屋をかさねた想像である。そして、これはこれで享和三年一年間の唱和集という独立した性格を有したものとなっただけに、上梓の発企もこの機に浮上しつつあったかと考えておきたい。

〈上巻の部　畢〉